

2024 年度 創造的な教育実践

1ゼミの武蔵の実践

1-1. 学部横断型課題解決プロジェクト

経済学部助教 笠原 一絵

この授業は、2008 年度に正規授業となり、今年度で 17 年目を迎えました。

2024 年度は、事前に(1月と4月)履修希望者に対して面接を導入した点が大きな変更点でした。この面接は、履修希望者を選抜するためではなく、履修に向けた心構えや詳細な授業内容を伝えつつ、履修希望者のやる気を確認するという目的で行いました。なお、例年通り定員より履修希望者が多い場合にのみ、学年や学科のバランスを考慮して選考いたしました。

一人ずつ面接することで事前に学生の様子が分かり、チーム編成の参考になりました。また、ガイダンスでは伝えていますが、改めて授業の大変さを説明することで、履修の覚悟をもてたことは学生にとっても良かったと感じます。

人文系のフェーズ1の課題については、これまで続けてきた「CI・ロゴマークの調査・分析」を削除し、「企業理念・歴史から企業文化を読みとく」という内容に変更しました。2024 年度の協力企業は歴史の長い企業でしたので、この課題でも十分教育効果がありました。

2023 年度から、課題は「CSR 報告書の作成」から「協力企業を取り巻く社会課題への提案」に変更し、協力企業は「1セメスター2社」から「1セメスター1社」とし、2チームがそれぞれ同じ企業を研究しました。(本プロジェクトでは、1セメスターを2つの期間に分け、中間発表までの前半をフェーズ1、最終報告会までの後半をフェーズ2としています。フェーズ1は学部系統ごとのチーム、フェーズ2では学部横断のチーム構成になっています。)

そして、2023 年度から教員は経済学部、人文学部、社会学部から各1名の3名体制から2名体制となり、2024 年度も経済学部と社会学部から各1名が担当しました。そのため、フェーズ1では経済学部と国際教養学部 EM 専攻のチームを経済学部教員が、社会学部、人文学部と国際教養学部 GS 専攻のチームを社会学部教員が担当することにしました。

春学期、秋学期ともに1クラスを開講し、定員は1セメスター20 名でした。春学期、秋学期の学部・学科別の履修者数は表1のとおりとなっています。内訳は、春学期は、経済学部が6名、人文学部が6名、社会学部が4名の合計 16 名、秋学期は経済学部が6名、人文学部が4名、社会学部が8名の合計 20 名です。男女比を見ると、春学期は男性3名、女性 13 名(男性比率 18.8%)、秋学期は男性7名、女性 13 名(男性比率 35%)と、春学期、秋学期ともに女性の履修者が男性を上回る結果で、ここ3年で男性の履修率が一番低い結果でした。なお、今年度は国際教養学部の履修生はいませんでした。

履修人数の関係で、春学期のフェーズ1では、2チームの社会学部を合同で1チームに、秋学期は同様に2チームの人文学部を合同で1チームの構成としました。これは、2023 年度から体制が変更したことと、「1セメスター1社」に変更したことにより、学部ごとの履修人数に偏りが生じても対応できた点です。また、定員が 20 名になりフェーズ1から全てのチームが1つの教室で活動できたことで、履修生と教員の双方にとってフェーズ2への移行がスムーズになりました。

さらに、課題を「協力企業を取り巻く社会課題への提案」にしたことや担当企業の業種から、学生にとって身近な視点からの提案を検討することが可能となり、以前より課題に対して「自分ごと」として取り組めるようになったようです。

表1 2024 年度学部横断型課題解決プロジェクト履修生(学科・学年・学科・性別)

セメスター 学科・コース	春学期				秋学期							
	2年次生		3年次生		1年次生		2年次生		3年次生		4年次生	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
経 済	0	1	1	3	1	0	3	0	0	0	0	0
経 営	0	0	0	1	0	0	0	2	0	1	0	0
金 融	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
英語英米文化	0	0	2	1	0	0	0	3	0	0	0	0
ヨーロッパ文化	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
日本・東アジア文化	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1
社 会	0	2	0	0	1	1	2	3	0	0	0	0
メディア社会	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
国際教養（EM専攻）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
国際教養（GS専攻）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
学科別・性別合計	0	5	3	8	2	2	5	8	0	2	0	1
セメスター別学年割合	31.3%		68.8%		20.0%		65.0%		10.0%		5.0%	
履修生合計人数	16				20							

今年度も春学期、秋学期ともに全面的に対面での授業(課外活動を含む)が実施できました。しかしながら、高校時代のほとんどをコロナ禍で過ごした学校生活(部活動や学校行事への参加、友人との関係構築などが制限されたこと等)の影響は非常に大きく、以下のようないくつかの状況が見受けられました。

- ・対人コミュニケーション能力が全体的に低下している
 - ・メンバーとのコミュニケーションに躓いたときに、自分の視点でしか物事をとらえられないためか、周りとの連絡を絶ってしまった
 - ・自分の考えを良しとして、他者を認めない学生がいることで、チーム活動に支障をきたすことがあった
 - ・せっかく横断ゼミで全学部のメンバーで活動しているのに、学部ごとに固まる傾向が高く、最後まで融合が難しい
 - ・興味のあることしか担当せずに、相手のペースに合わせるのが苦手な学生が数人いた
 - ・経験が少ないためか理解力が乏しい(資料を読み込む力、教員や他者の話を理解する力、等)。そのため、日本語での文章力や表現力も乏しく稚拙である
 - ・視野が狭く想像力が働かない
 - ・俯瞰して自分自身を見ることができないので、キャリアコンサルタントや他者評価を受け入れる余裕が本人にない
- 等です。

また、特にフェーズ1では、専門分野での基礎学力がかなり不足しているため、教員から調査や思考のフレームワークを丁寧に提示しないと調査分析できない等、論理的思考力がコロナ禍以前より低下しているように感じました。

一方、特に秋学期には、以下のような良い面も見られました。

- ・他者に配慮や気遣いができて、主体的に動ける学生が例年よりは多かった
- ・振り返りの日記で内省がしっかりできていた学生が多く、次の活動で改善していくことができた
- ・理解力が高い学生が例年より多かったので(GPAが高い)、教員からのアドバイスをしっかりと理解してすぐに改善につなげられた

このような状況下で、教員としては、個別面談を増やして学生をフォローしていく工夫をし、教員間の体制づくり等が更に重要になると感じました。

一方、2022 年度から Teams の活用を開始したことで、学生間で編集作業を共有してできるようになり、格段に作業効率が高まりました。報告書はこれまで Publisher で作成していましたが、Power Point で

共同編集しても以前と遜色ないクオリティになっています。

その反面、特に春学期は課外活動も対面ではなく Teams のオンラインをメインに実施したために、最後までチームビルディングも話し合いの内容も深まらない場面が見受けられました。やはり対面での活動の方が教育効果は高いことが改めて確認できましたので、来年度も引き続きこの方法で指導していく予定です。

さらに、Teams を活用すると授業用 SNS への投稿や活用が少なくなり、以前から継続していますが、今後も引き続き授業用 SNS の意義を改めて学生に伝えるとともに、授業用 SNS と Teams を組み合わせた使用方法を検討していきます。

この授業は2つの柱から成り立っており、一つが、「協力企業を取り巻く社会課題への提案」、もう一つが「社会人基礎力の育成と自己評価能力を高めること」です。表2は、後者の社会人基礎力に関するデータになります。春学期と秋学期を合わせた期間(通年)における履修生全員の平均値を見ると、受講前(事前評価)と受講後(事後評価)の間で最も伸びた能力は課題発見力でした(1.9 ポイントのプラス)。これは、論理的思考や物事を多面的に、かつ深く思考することの重要性を教員が常に伝え、学生がそれに応える形でチームでの思考を深めたことにより伸びた能力と思われます。また、学生自身が悩みながら、時には教員チームからのアドバイスやフィードバックを丁寧に行いながら、様々な課題(チーム活動における課題と、社会課題の内容とその提案、の2つの観点から)を学生自身が発見し解決する力をつけたことで、成長を感じたからと考えられます。

表2 社会人基礎力の事前・事後自己評価【2024 年度履修生】(学生による自己評価)

年度		2024年度		
カテゴリ/要素		事前評価	事後評価	差異(事後・事前)
通年②要素平均		6.9	7.8	1.0
1. 前に踏み出す力(通年)		7.0	8.1	1.1
①主体性	春学期	7.6	8.8	1.1
	秋学期	7.8	8.9	1.1
	通年	7.7	8.8	1.1
②働きかけ力	春学期	6.9	7.7	0.8
	秋学期	6.2	7.5	1.3
	通年	6.5	7.7	1.2
③実行力	春学期	6.7	7.8	1.1
	秋学期	6.7	7.7	1.0
	通年	6.7	7.8	1.1
2. 考え抜く力(通年)		6.2	7.5	1.3
④課題発見力	春学期	6.7	8.4	1.7
	秋学期	6.4	8.4	2.0
	通年	6.6	8.4	1.9
⑤計画力	春学期	6.3	6.7	0.4
	秋学期	5.2	6.9	1.7
	通年	5.7	6.7	1.0
⑥想像力	春学期	6.4	7.4	1.0
	秋学期	6.2	7.4	1.2
	通年	6.3	7.4	1.1
3. チームで働く力(通年)		7.1	7.9	0.8
⑦発信力	春学期	6.7	7.8	1.1
	秋学期	6.1	7.6	1.6
	通年	6.4	7.8	1.5
⑧傾聴力	春学期	7.7	8.2	0.5
	秋学期	7.8	7.9	0.1
	通年	7.8	8.2	0.4
⑨柔軟性	春学期	6.9	8.1	1.2
	秋学期	7.4	8.0	0.6
	通年	7.2	8.1	0.9
⑩状況把握力	春学期	6.9	7.8	0.9
	秋学期	6.7	7.8	1.1
	通年	6.8	7.8	1.0
⑪規律性	春学期	8.4	8.0	-0.4
	秋学期	8.2	8.2	0.0
	通年	8.3	8.0	-0.3
⑫ストレスコントロール力	春学期	6.9	7.4	0.4
	秋学期	5.9	7.1	1.1
	通年	6.4	7.4	0.9

* 表は 10 段階評価、小数点第2以下四捨五入のため差異が一致しない場合がある。

他方、最も“伸びなかった”能力は規律性でした(マイナス0.3ポイント)。これは事前評価の段階で、12項目の中で最も高いこと(事前評価で8.3ポイント)に注目しておく必要があります。これは興味深いことに毎年同じ傾向が見られます。学生は、学部横断型課題解決プロジェクト(以下、横断ゼミ)を通して自己と他者の関係性を理解することで「規律性とは本来何なのか」を知るのです。つまり正しく自己評価ができるようになった結果であり、規律性は“伸びなかった”のではないと考えられます。

社会人基礎力は、12の要素に分かれていますが、大きくは、前に踏み出す力、考え抜く力、そしてチームで働く力の3つのカテゴリーに分かれています。この3つのカテゴリーで見ると、考え抜く力は事前評価が低く、上昇幅も一番大きかったという傾向が見られます。

そして、不測の事態が起こる世に生き「頑張る」ことの価値が伝わりにくい世代と言われる現代の学生が、横断ゼミの履修を通じて、社会人基礎力の向上を実感し、学部ゼミでの活動や学外での活動を充実させたものにしていくことが期待されます。

今年度(2024年度)に課題を提供いただいた協力企業は、春学期が雪印メグミルク株式会社、秋学期が株式会社セブン&アイ・フードシステムズの2社です。2社ともに担当教員からの紹介です。学生たちは、協力企業に対して期待に応えたいという熱意のもと力を結集して取り組み、厳しくも温かい環境に恵まれた貴重な経験を積むことができました。

今年度は予算を計上し、履修生が春学期は北海道に酪農家の実態を見学させていただく機会のほか3つの工場見学を、秋学期は研修センター訪問、地域に密着した社会貢献活動の見学や社長インタビューなど社会と触れる様々な機会をいただくことができました。

このような機会や体験を通して、学生が社会課題に対して興味・関心・理解し、市民としての社会的責任や多様な視点を身に付けることが出来ると認識しております。

協力企業の担当者様は総じて、横断ゼミを通して本学学生を高く評価しています。毎年、歴代の協力企業(一部上場企業を含む)による採用実績が途切れないこともその成果と考えられます。授業後の、企業へのアンケート調査では、「当社の多くの社員と何度も交流したことで、深いシンパシーが生まれたのではないのでしょうか。ゆえに、当社社員と近い気持ちや目線になってしまうことで、外部の視点というよりも、もはや内部の視点のようだとも思いました。一方で、そのような深い理解が資料の完成度にもつながったと思います。」「学生の皆さまの斬新な視点に驚かされ、私たちの事業活動にとって貴重なインスピレーションとなりました。この経験を今後の事業発展に活かして参りたいと存じます。特に社会貢献のご提案はすぐに始められそうです。」などの回答をいただきました。

また、今年度もプロジェクト終了後の「振り返り」の授業内容を拡充して実施しました。これまでも当プロジェクトでは、「振り返り」のプロセスを重視し、キャリアコンサルタントとの面談や受講生間の相互フィードバックを実施してきました。様々な視点から、ポジティブ、ネガティブ両面を丁寧に徹底して振り返る作業は、この「振り返り」こそが成長において重要なプロセスであることを、学生たちに気づかせることを意図しています。自身の成長において他者の存在がいかに重要で貴重なものなのか、コミュニケーションの意味について認識を新たにした学生は多く、社会における企業の姿と、組織における自己の在り方を重ね合わせた、複合的な理解を促す授業であると言えます。

最終回の授業では、これまでの「振り返り」を未来にどう役立てていくのかを視野に、最後のチーム活動を行います。ゲストとして過去の受講生が登壇し、横断ゼミ終了後の学生生活や就職活動にどう役立てたのかについて話してもらうことが恒例となっています。履修学生にとって「自分の未来像」を重ねる対象である先輩たちから、横断ゼミで培った様々な力を就活や卒論に発揮できた成功経験が「自分の言葉で」語られました。

ある4年生は、「横断ゼミでやってみたいと思ったことは挑戦してみようというチャレンジ精神がつき、地方のインターンシップやこども食堂のボランティアなど意欲的に活動した。」と伝えていましたし、また別の学生は、「横断ゼミで頑張るほど得るものは大きいことを知り、就職活動には自信を持って挑むことができた。」と話してくれました。

「横断ゼミ」という同じ経験を共有した学生の言葉は親近感と説得力があり、社会人基礎力という指標で内省を深めた共通の経験があるため、この時間は、このプロジェクトのスピリットが学生間で継承されていく重要な機会となっています。

このように、横断ゼミで学生自身が最も成長を実感することとして、「これまでの知識を自ら積極的に深め、応用することができるようになること」が挙げられます。横断ゼミは、大学での学びと社会での実践を繋ぐ、まさに「横断」の役目を果たしています。横断ゼミを卒業した学生達が「横断ゼミを『横のつながり』だけで終わらせるのではなく、横断ゼミ卒業生達による『縦のつながり』を形成していきたい」という趣旨のもと、学生有志団体「学部横断ゼミ Alumni」は積極的に活動しているようです。横断ゼミ後に挑戦したことや就職活動についてなど、様々な話ができる場を開催するなどの企画を実施しました。学生たちの横断ゼミでの経験は、培った能力を柔軟に発揮できる場を学内外に積極的に求めて、自らの力で新たな行動を起こすことに着実につながっています。



フェーズ1・人文学部の様子(春学期)



フェーズ2・学部横断チーム(秋学期)

1-2. ゼミナール対抗研究発表大会(経済学部)

経済学部 ゼミ大会 プロデューサー 高橋 由香里・内藤 知加恵

<2024 年度「ゼミナール対抗研究発表大会」の概要>

本学のゼミナール連合会が主催する経済学部・ゼミナール対抗研究発表大会(通称「ゼミ大会」)は2004年の第1回より続いている「ゼミの武蔵」を代表するイベントの1つである。今年度のゼミ大会は2025年1月11日(土曜日)に開催された。

ゼミ大会では、経済学部のゼミから27チームが出場し、6つのブロックに分かれて、20分間のプレゼンテーションと15分間の質疑応答を通して日頃の研究成果を競い合った。また、経済学部部門と併せてチャレンジ(同窓会)枠も設けられ、3チームが出場した。チャレンジ(同窓会)枠は、2017年度に武蔵大学同窓会の提案により創設された発表枠であり、学部・学年や研究分野を問わずユニークな研究に取り組むグループや個人に対して発表機会を設けることを意図している。

経済学部部門の各ブロックでは、その専門領域に応じて選出された審査員が①発表資料、②表現力、③着眼点、④調査分析、⑤論理整合性、⑥専門知識・先行研究、⑦質疑応答力の7つの観点から審査を行った。各ブロックの審査員は4名から構成されており、うち2名は実務界で活躍している本学OB・OGが担当し、残り2名は本学経済学部の教員が担当した。厳正な審査の結果、各ブロックの優勝・準優勝チームが決定し、それぞれ賞状・賞金が授与された(一覧表を参照)。

ゼミ大会は、出場する学生にとって多面的な教育的効果が見込まれる。発表テーマに関する専門的知識の習得や深化はもちろんのこと、発表の準備段階における学生間での役割分担や作業を通じて、チームワークや問題解決能力が養われる。また、大会当日は実務・社会経験が豊富なOB・OGが審査員を務めるため、プレゼンテーションには実社会への応用性や、より広い対象に理解を促すための能力が要求される。また、大会終了後の懇親会における審査員との交流は、実務家の知見を得る貴重な機会となる。これらから、学生は通常の講義やゼミナール活動だけでは得られない経験・学習の機会を得ることができる。

また本学のゼミ大会は、学生が運営を行っている点に特徴がある。同窓会、職員、教員などのサポートのもと、学生団体である武蔵大学ゼミナール連合会がゼミ大会の企画・運営を行っている。また、大会当日はサポートスタッフとして出場ゼミの学生が運営に携わる。大学の予算と設備を使用することもあり様々な制約がある中、運営にあたっては多くの手続き、文書作成や関係者とのコミュニケーションが求められる。そのため、運営に携わる学生も、社会人として役立つスキルを修得することができる。

<今年度の改善点および今後の課題>

(1) 出場チーム数の増加と実施日の決定

昨年度末に経済学部教員にアンケートをとり、出場チーム数の減少と実施日確保が困難であることへの対応を中心に、ゼミ大会の運営全般について検討した。出場ルールに関して、昨年度までは専門ゼミ第1部と第2部から各1チームのみという制限があったが、教員としては1学年から2チーム出場できるようにしてほしいという声が多かった。これを受けてゼミナール連合会にルール変更の検討を依頼し、今年度から学年を問わず専門ゼミ全体で2チーム出場できるようになった。その結果、今年度は第2部から2チーム出場したゼミが多く、出場チーム数(チャレンジ枠除く)は昨年度が20だったのに対し今年度は27と増加した。1チーム5名までという制限も廃止され、より多くの学生に発表の機会を与えることができるようになった。

また、学事日程と入試日程の関係で、大学施設、学生、社会人審査員、および教員審査員の全ての都合が合う現実的な日程が、成人の日を含む3連休以外にない年度があるという問題に対応するため、教員の観点から実施可能な日程に関するアンケートをとった。教員からは1月実施を望む声が多く、次に12月第1土曜日という声が多かった。ゼミナール連合会が検討した結果、当面の間、①1月第2土曜

日、②1月第2日曜日、③12月第1土曜日という優先順位でゼミ大会を実施することとなった。12月第1土曜日というイレギュラーな日程で実施される年度が予め決まったため、ゼミの指導計画に反映させることができるようになった。

(2) 運営体制に関する課題

次年度以降の実施日が決まったという点では良い反面、主に1月第2土曜日に実施されることに関する課題がある。大学施設が利用できなくなる冬季一斉休業期間がゼミ大会直前にあるため、出場者はオンラインツールや学外の場所を活用して発表準備の追い込みをかける必要がある。また、運営者であるゼミナール連合会も、特に職員の方に依頼する事項に関しては、12月の期末試験期間中に手配を済ませる必要がある。今年度はパンフレット(電子版)の完成が大会前日となり、結果として大会プログラムの事前の周知・告知がほとんどできなかったため、特に運営側の早めの準備が今後の課題である。日程の問題以外にも、1～2年生のみから構成されるゼミナール連合会において、例年、運営ノウハウや注意事項の申し送りが課題となっている。安定的に大会運営をするため、可能な限りゼミ大会担当教員もサポートしていきたい。

<出場チーム、及び発表テーマ一覧表>

ブロック	ゼミ名	優勝 ◎ 準優勝 ○	テーマ名
経済 A	大野 早苗 A	○	地方銀行と地方創生の関わり
	阿部 景太2		離島の排他的経済水域の漁獲活動からの経済価値の予備的推定:南鳥島を例として
	佐藤 宇樹2	◎	新幹線がもたらす地域経済効果
	田中 健太2		有給取得率向上は企業の利益を向上させるのか?ーウェルビーイング経営の経営パフォーマンス効果の検証
	原 朋弘1		インドネシアにおける宗教教育と経済効果の関連性分析
経済 B	阿部 景太2		高齢化の著しい地域であっても、スマート漁業の普及は漁獲量の増加につながるのか
	大野 早苗 B		賃上げしている企業の傾向を知る
	茶野 努2	◎	人はなぜ離職するのか
	釣 雅雄2	○	移民と AI:日本の労働力不足を救うカギとなるのか
経営 A	伊藤 誠悟2		複数人リーダーシップとプロアクティブ行動
	大平 修司2	○	カプセルトイレ利用における感情体験が消費者行動に与える影響
	鈴木 真也 B		お酒の分散化と消費行動の変化
	鈴木 正明1	◎	日本の1次産業における6次産業化の有用性 ～6次産業化を成功させるためには～
	山崎 秀雄1		組織における「活動意識」と「コントロール感」との関係
経営 B	鈴木 正明1		CRM(コース・リレーテッド・マーケティング)商品を実際に買ってもらうにはどうすればよいのか
	伊藤 誠悟2	◎	武蔵大学生のゼミにおいてのリーダーシップの特徴及びその構成経験
	高橋 由香里2		人的資本の蓄積と企業価値の関係性について
	森永 雄太2	○	経験によるフォロワーシップ行動の違い
金融・会計	海老原 崇2	○	自己株式買付終了前後の株価変動要因の分析
	茶野 努1		若者の投票率を高めよう～138 か国の国際比較を通して～
	中嶋 幹1		株価と天気の関係
	神楽岡 優昌2		食品会社に対する気候変動の影響
	山下 奨2	◎	日本企業と多角化戦略 現在の日本企業の多角化傾向と多角化のメリットの再検討
会計・経営	大平 修司2		クチコミにおける信頼性の決定要因
	海老原 崇2	◎	株式分割の株価上昇効果について
	山崎 秀雄1	○	上司のフィードバック、コミュニケーションと職場への満足度との関係性
	山下 奨2		財務特性から見た粉飾決算の兆候 ～カネボウ事件をケーススタディとした不正会計の見 抜き方～
チャレンジ枠(同窓会)	うるし座★	○	カブレボ!～やっぱり、歌舞伎は夢だらけ～
	NaOH	◎	防災教育の再デザイン
	チーム 221B		ホームズ、コカイン、児童書

(注)ゼミ名に付記される1,2は専門ゼミナール第1部,第2部を表し、A, B は縦ゼミを表す

1-3. 卒業論文報告会(人文学部)

人文学部 教授 嶋内 博愛

2024 年度の人文学部卒業論文報告会は、1月 29 日(水)の午後に、昨年度に引き続き対面で開催された。会場は、英語英米文化学科は 8702 教室(286 人収容)、ヨーロッパ文化学科は 8604 教室(199 人収容)、日本・東アジア文化学科は 8503 教室(257 人収容)だった。今年度5期目、そして来年度からは国際教養学部に移るため人文学部としては最後の開催となる GSC(英語プログラム)の Capstone Project Symposium は、コロナ禍を経て3回目の対面開催となり、午前中のポスターセッション(後述)も含め8号館8階の記念ホールで行われた。本報告書の執筆者は今年度人文学部教務委員長を務めており、また当日は各々について全体を俯瞰するような形で参加した。以下、開催までの経緯や気づき等を記す。

人文学部の卒業論文報告会は従来対面方式で行われ、また 2012 年以降は一般公開もしていたのだが、2020 年度と 2021 度は、新型コロナウイルスの感染拡大状況に鑑みて、ZOOM を用いたオンライン・ライブでの開催を余儀なくされていた。今年度は、昨年度に引き続き、全面的に従来の形式に戻しての開催となった。

今年度の口頭報告者は、英語英米文化学科5名、ヨーロッパ文化学科5名、日本・東アジア文化学科8名、GSC(英語プログラム)5名のあわせて 23 名となった。コロナ禍以前と比べると報告者数が学科によってやや抑え気味になっているのは、対面開催の時間を長引かせない工夫だったともいえる。報告者数が抑えられた分、より充実した質疑応答が繰り広げられた。

卒業していく4年次生にとって本報告会での発表は、自ら執筆した卒業論文の顕彰という意味合いがあるとともに、大学でのゼミナール活動の締めくくりともなる。各報告者は、卒業論文ゼミナール及び Capstone Project Seminar の指導教授の推薦のもとに各学科・コースから選出される。推薦の基準は、提出された卒業論文の内容が学術的に優れていること、学科によっては、テーマの設定や分析の視点・方法等にとりわけ独創的な点がみられることが考慮される。これは、主たる参加者である3年次生が自身の卒業論文と向き合うにあたり、柔軟な思考を獲得する一助となることを期待しての配慮でもある。3年次生は、卒業論文準備ゼミナールの一環として出席必須である。そのほかには発表者の同級生である4年次生など数多くの学生が参加した。学生以外では、論文指導にあたった専任教員だけでなく、4年間にゼミナール等を担当した非常勤講師の姿もみられた。発表者の関係者の方からも聴講可能かどうかの事前問い合わせがあり、各学科・コースの会場の席が埋まった。

各報告者の持ち時間は限られているため、短時間でコンパクトに論文のポイントを伝えるべく、さまざまな工夫を凝らしたプレゼンテーションが行われた。例年同様、事前に A4サイズ4枚以内のハンドアウトを作成しているのだが、それとは別にこの日のために準備したパワーポイント等のスライドを用いる者が、今年度も多数みられた。ハンドアウトが文字情報主体かつ白黒であるのに対し、発表用に準備されたスライドには文字情報だけでなくカラーの写真や図表等もふんだんに用いられ、視覚効果を高めようと工夫した様子がうかがえた。なかにはプレゼンテーションにあたって、発表内容と関連する動画・音楽を使用する者もあり、従来人文学部にありがちだった、文字と肉声中心で、視覚や聴覚効果によるインパクトに乏しいものから、確実に変化しているのが感じられた。コロナ禍以来強く見られるようになってきた、こうしたヴィジュアルも考慮する傾向は、学生にとっては4年間の学びにおいて否応なく迫られた結果かもしれないが、FD の観点からみると好ましい効果が得られた点もあると言えそうだ。

GSC(英語プログラム)の Capstone Project Symposium のポスターセッションについては、特筆しておきたい。論文提出者全員(27 名)が、事前に自身の論文について A1サイズのパスター(言語は英語)にまとめ、当日は 10 時 30 分の開始時間に間に合うよう、朝から会場設営やパネルへの掲示作業を行った。掲示されたポスターの内容に関心をもって足を止めた参加者に、その場で英語で(質問者にあわせ、ときに日本語も混じえつつ)受け答えをする様子が、会場内のあちらこちらで見られた。

口頭報告は、3学科については日本語、GSC(英語プログラム)については英語で行われた(Capstone Project は英語による執筆)。今年度の口頭報告題目は以下の通りである。

【英語英米文化学科】

- ◇ アリスのファッション分析——キャロル、テニエル、19 世紀のファッションが織りなす物語
- ◇ ディズニープリンセス映画の変化に見るアメリカの女性像の変容
- ◇ 現代の『フォースタス博士』上演・翻案における女性表象
- ◇ 現代アートと死体展示における商業化と倫理的問題の関連性——ダミアン・ハーストの作品を中心に
- ◇ カントリー・ミュージックのリベラル化について

【ヨーロッパ文化学科】

- ◇ ディオニュソス信仰と女性——古代都市ポンペイの秘儀荘「赤の間」の壁画解釈に向けて
- ◇ ヨーロッパにおける分割埋葬——ハプスブルク家の三分割埋葬を手がかりに
- ◇ 19 世紀フランス文学におけるファム・ファタルとその母親——ブルジョワ社会における母娘の関係との比較
- ◇ 偶像崇拜とアイドル
- ◇ 東ドイツにおける 1953 年6月の挫折と独裁の巧妙化——『Neues Deutschland』紙面から見る「修正」

【日本・東アジア文化学科】

- ◇ わがファミリーヒストリー
- ◇ 『万葉集』巻二・二〇三 但馬皇女挽歌の訓と歌意
- ◇ 東京自慢名物会の役割——日本橋地区からのメッセージ
- ◇ 宮沢賢治童話論——登場人物の死が示すもの
- ◇ 台湾人のアイデンティティ——台湾人のアイデンティティを形成したのはいかなるものか
- ◇ なぜ谷川俊太郎の『うつむく青年』『生きる』が合唱曲の歌詞として人気なのか
- ◇ 安永・天明期の歌舞伎における役者と観客の関係性——五代目市川團十郎を中心に
- ◇ 東国武士と女性の善光寺信仰

【GSC(English)】

- ◇ Mind the Gender Gap: Ways to Increase Female Representation in the Japanese Diet
- ◇ The Importance of the Term “Dokuoya” [Toxic Parents] in Japan
- ◇ LGBTQ+ Inclusive Campus Project
- ◇ The Experience of Japanese American Women during the Incarceration
- ◇ Analysis on Autocratic Reversion

以上

1-4. シャカリキフェスティバル(社会学部卒業研究発表会)

社会学部 矢田部圭介(シャカリキフェスティバル担当)

シャカリキフェスティバルは、社会学部の卒業論文・卒業制作(2020年度からはGDSコース所属学生の卒業活動も対象)の成果を発表するための機会として2009年度からはじまり、本年度で第16回となりました。「シャカリキ」という言葉には、「社会学の力」という意味と「がむしゃらに頑張る」という意味とがこめられています。また、競うというよりも、多様な成果をおたがいに披露しあう場という意味をこめて「フェスティバル」と名づけられています。

本年度のシャカリキフェスティバルは、2025年1月29日(水)に、5年ぶりに対面で開催されました。

過去の対面開催では、会場を3つ設置していましたが、今年度は、各会場の聴衆の人数を減らし、できるだけ質疑応答をしやすくすることを目指して、会場を5つ設置しました(1001・1002・1101・1201・1203)。各会場で、前半と後半の2部会(ただし1203会場は前半のみ)、合計9部会が開催され、各ゼミから選出された、卒業論文20点、卒業制作3点、あわせて23点の発表と質疑応答が行われました。

各会場には、3年生と4年生を中心に、1・2年生も含めて社会学部の多くの学生の参加がありました。また発表者のご家族など、学外からのお客様もありました。

会場の聴衆の規模が過去の対面開催時より小さく、また司会の教員の努力もあって、各会場ではインテイメイトな空気が流れ、質疑応答も活発になされていたように思います。また、部会終了後に、発表者に詳しい質問をしている参加者の姿も見られました。

積極的に質問していた参加者の多くは、3年生のようでした。今年度、3年生がシャカリキフェスティバル終了後に提出したコメントシートには、例えば、“現場に向かうことの大切さを痛感した”といった、これから行う卒業研究にどう活かすか、という観点でのコメントが多く見られました。“自分の卒論について考える貴重な時間だった”というコメントもあり、3年生にとって、このシャカリキフェスティバルが、4年次へ向けての重要な機会であることがうかがえます。12月に授業が終了し、翌年度の4月まで授業がない現状では、シャカリキフェスティバルが、3年生の研究の継続にとって、これまで以上に大きな役割を果たすようになっていると思われます。

もちろん、シャカリキフェスティバルを楽しんだのは3年生ばかりではありません。4年生の書いたコメントシートには、例えば“ものごとを別視点でとらえるよい機会になった”という主旨のものもありました。自分自身も、卒論を書き上げ、卒制を作りあげたうえで、同期の仲間たちの卒業研究にふれ、その多様さにあらためて驚いている様子がよく分かります。4年生にとっても、シャカリキフェスティバルは、発表者であつてもなくても、これまでの自分たちの卒業研究をふりかえる大事な機会になっていると思われます。

各会場では、3・4年生ばかりではなく、1・2年生からの鋭い質問がみられるケースもあり、専門ゼミに所属する以前の学生にとっても、自分のこれからの研究を具体的に考えるために役に立つ機会になっているようでした。今後は、こうした専門ゼミに所属する以前の学生のシャカリキフェスティバルへの参加をより盛んにしていくことが、卒業研究のクオリティを、さらに上げていくための、ひとつの課題になるように思われます。

2024 年度シャカリキフェスティバル発表タイトル

A 会場(1001 教室)

前 半	司会： 垂見裕子	「自己決定にもとづく HPV ワクチン接種」という欺瞞——当事者世代・母世代へのインタビュー調査から
		なぜ出産の痛みは軽視されてきたのか——無痛分娩の普及を妨げる原因とは
		男性の性被害はなぜ告発しづらいのか——ジャニーズの性被害を参考に
後 半	司会： 林玲美	メイドカフェ空間という特別な空間を探る
		ドラッグクイーンとメディア——日本で活動するパフォーマーへのインタビューを手掛かりに

B 会場(1002 教室)

前 半	司会： 針原素子	『31 ぴきのねこ日めくりカレンダー』——容姿やルッキズムに悩む女性への応援メッセージとして(卒制:出版物)
		知りたがりのおせっかい——おしどりマコ・ケンの 14 年(卒制:映像)
		コスプレイヤー集めて街も変わる?(卒制:映像)
後 半	司会： 南田勝也	現代のテレビドラマと SNS の関係性——ドラマ「silent」の反響とその変遷
		2次元キャラクターの“実在性”についてー現実とのリンク

C 会場(1101 教室)

前 半	司会： 林凌	共感でつながるグリーンツーリズム——新しい農村問題に応える「田んぼと畑の耕育教室」の事例から
		シェアリングサービスの傾向と社会的影響——Charge SPOT・レンタサイクル・アイカサの事例から
		埼玉県さいたま市大宮区・大宮駅のネパール人エスニック・ビジネス——社会的つながりの活用と豊富なビジネスチャンス
後 半	司会： 中西祐子	親子関係と学習意欲の関連——親への信頼感に着目して
		高校生の性知識に対する性教育の影響——性差・個人差・学校差に着目した定量的分析

D 会場(1201 教室)

前 半	司会： 林雄亮	横浜市における ICT 教育とその背景
		YouTube 上の教育系コンテンツにおいて評価の高い動画はどのようなものであるか
		ライフコースの視点からみる「野球人生」——野球青年がどのように野球と関わり、またどのように野球から去っていくのか
後 半	司会： 人見泰弘	VAR でサッカーは楽しくなるのか——審判の役割を考える
		スポーツ応援と集団意識

E 会場(1203 教室)

前 半	司会： 宇田川敦 史	なぜレギュラー古着を購入するのか
		フィンランドサウナと心の安寧
		労働は音楽の聴き方を左右するか——リスク社会における労働と文化消費